書評

関口安義著『キューポラのある街　評伝早船ちよ』

石崎　等

著者は芥川龍之介の研究書を多数ものしているのみならず、松岡譲、豊島与志雄、藤岡蔵六など、芥川周辺の大正文学者・文化人についての評伝作者としても知られている。しかし著者のフィールドは広く、児童文学者についても造詣が深い。今度の『キューポラのある街　評伝早船ちよ』は、三年前、児童文学者・今西祐行についてまとめた『一つの花　評伝今西祐行』と同じ系譜に属するものである。

早船ちよは《書くこと》に魅せられた永遠の娘である。その娘に対する著者のまなざしはかぎりなく優しい。彼女が残した多くの作品が勤務先の図書館で待っていたことも偶然とはいえ羨ましい。早船ちよのパートナー・井野川潔が残した業績をそれに近いかたちでじかに手にすることのできた環境もこの評伝を密度の濃いものにしている。早船ちよの評伝作者となるために、著者は、内発的条件だけでなく、外発的条件にも恵まれていたのである。

この本は、早船ちよ文学の特質とその文学形成を育んだ風土と時代環境とについて、慎重かつきめの細かい調査を積み重ねてまとめ上げた評伝である。とくに大正デモクラシーの下、生活綴方という自由主義的な作文教育の実践を、早船ちよが学んだ高山尋常高等小学校の文集『ぎんのすゞ』にたどり、その指導者の影響関係まで精査した功績は大きいものがある。

筆はさらに在野の優れた教育（運動）史研究家で科学技術史家でもあった井野川潔との出会いとその後の生活についても大幅に割かれている。また夫婦で推進した戦後の文化運動や三〇年間続いた雑誌『子ども世界』など、戦後の児童文化運動の担い手としての二人についても過不足のない記述がなされている。

著者は『キューポラのある街』の続編を期待する読者の反応の凄まじさを紹介している。律儀な早船ちよは、ファンレターに対したんねんに返事を出しているが、やがて自分の時間を確保するために、それに応じられなくなったことに触れている。進歩的な子供文化を推進するためのサークル・読書会・講演など、《作家》活動を制約する諸行事も多くなる。そうした過度な要求にどう対処するか。読者の視線を避けたくなることも多くなる。読者との関わりを忌避したくなる。ワインが発酵し芳醇なものとなるには、作家としての読書と思索、そして何よりも時間が必要になる。読者の過度な期待の地平はわずらわしさに変貌する。作家の成熟にはそうした処世術もまた必要だ。メッセージ性の強い作者ほど、読者のイデオロギー性も負荷として作用する。この因果関係は早船ちよの宿命でもあった。

人は年輪を重ねるに従い、本来の自分に近づいていく。自分に備わっている素材以上に出ることは至難である。自分の限界を知ることによって、新たな第一歩を踏み出す。《ちさ・女の歴史》

を書き続けるプロセスで、他者の《貧乏》、都会の片隅の《貧困》が自分のことのようにリアルに感受され、やがて成熟を迎える。『キューポラのある街』は早船ちよの新しい文学的可能性として出現する。本書は、《キューポラのある街》シリーズ六部作と《ちさ・女の歴史》シリーズ六部作がどのように生成・発展してきたかをたんねんに検証している。とくに《ちさ・女の歴史》は、約二〇年先輩の島本久恵の長篇自伝小説『長流』全一〇巻を想起させる。島本の作が明治の女性史であるのに対して、《ちさ・女の歴史》は昭和女性史の趣きがある。ただ作品内容の詳細な分析は今後に委ねられているようだ。

本書の冒頭は、住田ちよの故郷・飛騨が「美しい風土」として描かれている。フィールドワークを踏まえ、飛騨の自然から得た著者の感想は偽りのないものであろう。またその方法は手堅い。住田ちよは、一六歳のとき、「美しい風土」に生きる人々によって、石もて追われる如くに故郷を去り、長野県諏訪で紡績会社のきびしい製糸女工体験などを経て、『綴方読本』の編集者の小砂丘忠義を頼って上京する。飛騨は現在も、そして過去もそうであったように美しい。しかしそうした自然の中で――というより、真実は、山に囲まれ、閉鎖的であるがゆえに封建的な階層社会であり、身分秩序がことのほか厳しかった〝美しい飛騨〟というトポスの中で、苦悩に苦悩を重ねた住田ちよをすんなりと語ってしまってよいものだろうか、という疑念が浮かんでくる。

なるほど、著者は、最後のほうで、今次の戦争をはさみ、長い時間をかけて、住田ちよの苦悩が浄化されてある《和解》をしたように書いて、ある整合性をもたせている。著者は、その要因を、いくたびか郷里を訪ねるようになった早船ちよの「よそ者の旅人の眼」によって可能となったように書いている。『ふるさと飛騨』『わたしの飛騨』などの著書から、早船ちよの郷土論のエッセンスをたんねんに抽出して論拠を固めている。

早船ちよについてほとんど知らない者としてあえて独断と偏見を犯して述べるならば、もしそうなら、彼女の《和解》は《アイデンティティ》の発見としては弱いように思われるがどうだろうか。「よそ者の旅人の眼」で朝市に感動することは、どうしても少女ひとりで故郷を脱出した人間として折り合いがつかないように感ぜられる。故郷を責めることと許すこととの葛藤、その精神のダイナミズムが、ドラマが、ほしいからだ。そうでなければ、飛騨古川町にある《早船ちよ文学館》はただ功成り名遂げた一文学者の記念館となってしまうであろう。

この本は、また時局性を豊かにもっている。時代に開かれているといってもいい。現代社会の矛盾を早船ちよの一九六〇年代の仕事と重ねて論じている。そのことの意味は重要だ。『キューポラのある街』には格差社会や教育問題、北朝鮮帰還問題などがルポルタージュの創作方法によってティピカルにテーマ化されているからだ。それに伴い、他の研究書にはない、著者の体験的な肉声を聴き取れる。それは私の体験に近い。ある時代を生きた者だけに共通する《匂い》のようなものが感じ取れる。

他にもいろいろと考えさせられた点がある。《代筆》《合作》《共同制作》の問題である。作家の才能と理論や方法に長けた援助者

との関係である。著者はそれを一概に否定しない。プラスという観点から肯定している。また、早船ちよの生涯に起きた周辺の重要事件を挿入することによって、作家の《書くこと》の重みについて浮かび上がらせる。たとえば、高齢者介護の問題である。早船ちよの友人・松井英子が老母の看護に疲れ、自宅で自死した事件は、大きく新聞報道され社会的な関心を引いたことで知られる。もちろん早船ちよ・井野川潔共通の知人であり、仕事上、盟友ともいえる存在であった。著者は、井野川の、沈痛の思いにとらわれていた仲間を鼓舞しようという気持ちからか、あるいは作家は作品がすべてだということを言おうとしたか、「作家はどんなとき、どんな場合でも、必ず書くということに執念しよう」というそのときの発言を引用している。それはそれで意味があったといえよう。しかし、そのことばは松井英子が直面していた深刻な現実を何ら救抜するものではない。〈老―病―死〉の問題に作家の特権性などない。作家は職業に過ぎない。〈老―病―死〉という終末医療の手助けをしてやること、それは人間としての行為であり、作家としてのものではない。松井英子の悲劇は、子供に夢を与え、生きることの意味を描く〈多くの〉児童文学者＝作者が、肉親の〈老―病―死〉をどう克服すべきかという問いをわれわれに突きつけてくる。《書くこと》はその次の問題ではないかと思われるのだが、どうであろうか。《書く》《書かない》《書けない》を超越した地点に立っていたのが首を括ろうとした瞬間の思いではなかったか。

著者は、文学の価値を人生におけるパンのように考えておられる向きがある。少なくとも私より強いことは確かであろう。こと児童文学はその傾向が顕著でもある。しかし子供向けに書かれたものであっても、芳醇なワインを要求する大人の読者もいることだろう。最近の長篇ファンタジーにはワインどころか毒も含まれている。秩序や法則をはみ出し、逸脱しようとする人間の想像的エネルギー――混沌、叛逆、虚無、悪、謎などなど。いや、子供に飲酒は御法度、法律で禁じられているから、そのような考えは不謹慎の謗りを免れまい。子供でなくとも、スーパーなどでの酒類購入には二〇歳以上である年齢証明が必要である。だが、《文学》である限り、アルコールを一定量含んだワイン的な要素を抜くことはできない。個性的読書とは、優れた文学テクストに含まれた芳醇なワインをしばし味わうことでもあるからだ。

そのようなことを考えながらも、私はこの本を面白く読了した。教えられること多々であった。かつて中島国彦さんたちと文学年表を作ったとき、一九六一（昭和三六）年の項に、早船ちよの『キューポラのある街』を入れた。児童文学の傑作にも目配りをするという方針からであった。今回、《早船ちよもの》――彼女が賭けた文学の夢をもう少し知りたくて、本屋に行ったが容易に見つけることはできなかった。文庫本などにも入っていないらしい。著者の熱意とのギャップをどう受け止めたらよいのかしばし戸惑いを感ぜざるをえなかった。

最後に、著者は「あとがき」で川口の中学校教師時代に教えた一在日朝鮮人の少年に触れている。金史良（キムサリヤン）の「光の中に」のような事件があったのかどうかは知らない。『キューポラのある街』

を論じる視角から当然の関心であろうが、私にも想いはある。中学の友達に二人の在日朝鮮人がいた。呉山君は、わずかにチョビひげを生やし、朝礼台の上に立たされ、翌日からいなくなった。「俺、これから〈呉〉になるんだ」と言っていた。すばしこいい奴であった。もう一人は今日に至るまで友人として長いつき合いである。最近会わなくなったが。在日朝鮮人の北朝鮮への《エクソダス》について、彼らの量り難い歴史の多くを知らなかったけれども、記憶に残る人間的な触れ合いを消し去ることはできない。

（二〇〇六年三月　新日本出版社　B6判　二八六頁　税込一八九〇円）

新刊紹介

関口安義著

『世界文学としての芥川龍之介』

タイトルに象徴されるように、近年は村上春樹の長い序文を添えたペンギン古典叢書（ジェイ・ルービン訳）の出版、初の中国語訳全集の刊行、またロシアでも新選集が出されるなど、〈世界〉と芥川をめぐる通路が広がっている。本書はその気運を受け、特に芥川受容が盛んな中国・韓国における研究状況を活写、「忠義」論ではルービンの清新な指摘を導き手としての新解釈、「馬の脚」論・「支那游記」論では主に中国人研究者による成果を踏まえ、日本語圏では思考不能だった地点からの問いを発信する。構成は章ごとに綿密にテクストを扱う各論の形を取るが、随所に評伝研究の大家である著者の面目が躍如する。『学友会雑誌』掲載の河合榮治郎「項羽論」と「義仲論」の交響を証しつつ芥川の漢文受容の基底に迫る第Ⅰ章など枚挙に暇はないが、著者の長い研究歴において初の「地獄変」論が収められたことに、本書の重みがある。

（二〇〇七年六月　新日本出版社　四六判　二五四頁　税込二一〇〇円）〔小澤　純〕

高橋広満著

『吉行淳之介――人と文学』

父エイスケは「新興芸術派の作家」であり、母あぐりは「美容家」であった――この事典的な前提を、敢えてもう一度問い直すところから、本著ははじまる。その後も、吉行の生涯が詳細に追われ、同時に、彼の多岐にわたる作品が、深く掘り下げられていく。そして「あとがき」で述べられているように、父母の追い求めた「昭和初期のモダニズム」が「戦後という時間に飛」んだという「夢想」を、吉行淳之介に見ながら、本著は円環を描く形で閉じられていく。

「人と文学」というシリーズの名にふさわしく、本著は吉行淳之介の生涯と作品とを見事に融合させ、織り成したものである。現在、再評価されつつある吉行を顧みるためには、あるいは「昭和」という時代を再考するためには、決して見逃すことのできない一冊であろう。

（二〇〇七年一〇月　勉誠出版　四六判　二四四頁　税込二一〇〇円）〔平　浩一〕